



## 青森県岩木川下流域におけるオオセッカの繁殖期の個体数

小林豊<sup>1</sup>・小山信行<sup>2</sup>

1. 日本野鳥の会. 〒151-0061 東京都渋谷区初台1-47-1 小田急西新宿ビル1F

2. 日本野鳥の会弘前支部. 〒036-8032 青森県弘前市徳田町33

### はじめに

オオセッカ *Locustella pryeri* は、中国東北部、ロシアのウスリー地方および日本に分布するウグイス科センニユウ属の鳥で、大陸産亜種オナガオオセッカ *L. p. sinensis* と日本産亜種オオセッカ *L. p. pryeri* の2亜種がある(茂田 1991, Morioka & Shigeta 1993, 日本鳥学会 2000). 本種の日本国内での生息数は1,000羽程度とされており(金井・植田 1994), 環境省のレッドデータリストで絶滅危惧IB類に挙げられている.

国内での主要な繁殖地は、青森県岩木川下流域, 青森県仏沼周辺, 利根川下流域とされている(永田 1997). また越冬地は、関東から瀬戸内海沿岸の太平洋側とされているが(永田 1997), ある場所で繁殖したオオセッカがどこを越冬地に行っているかということとはよくわかっていない(山階鳥類研究所 1996, 1998).

青森県におけるオオセッカの初記録は、1972年に岩木川河口から17km南の平滝沼南部でさえずる5羽の発見と繁殖の確認であった(大八木 1973). その後、田光沼を含め平滝沼、ベンセ沼など屏風山地域と岩木川下流域を加えた青森県津軽地方のさえずり個体数は1974年に246羽, 1981年76羽, 1982年112羽, 1984年124羽, 1985年151羽, 1989年82羽と変動し(小山 1990), 1992年には116羽が記録されている(村田 1993). また、1975年に環境庁の委託で日本野鳥の会が実施した調査では、岩木川河川敷, 十三湖, 田光沼, ベンセ沼, 平滝沼, 廻堰大溜池など津軽地方のオオセッカ生息数を、さえずり個体数を2倍して500~600羽とし、当時の国内最大の繁殖地としている(日本野鳥の会 1976).

この他、日本海側では秋田県の八郎潟干拓地が本種の繁殖地として知られており、1977年には122羽が記録されていたが、1992年には6羽と減少し(西出 1993), 1998年に記録されたのは1羽となっている(山階鳥類研究所 1998).

2003年1月20日 受理

キーワード: 岩木川, オオセッカ, 個体数変動, 湿原, 津軽地方, 屏風山

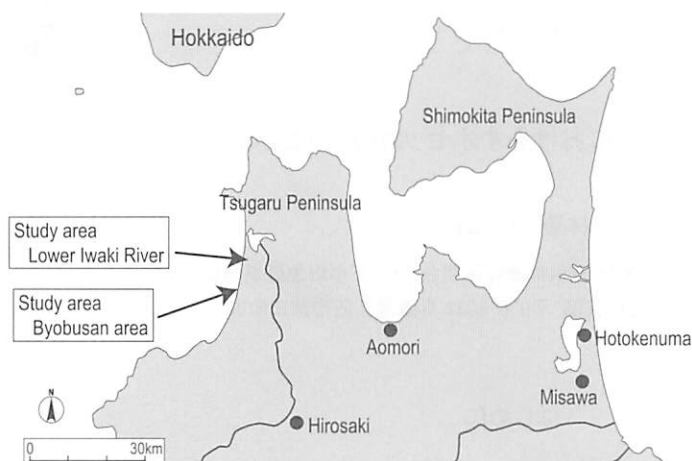


図 1. 調査地

Fig 1. Study areas.

筆者らは、国内のオオセッカの繁殖個体数を把握するために行なった日本野鳥の会のオオセッカ生息状況調査の一環として、日本野鳥の会弘前支部の協力を得て岩木川下流域と屏風山地域においてオオセッカの繁殖期の個体数調査を行なったので報告する。

### 調査方法

調査地は、青森県北津軽郡市浦村、中里町、西津軽郡車力村にまたがる岩木川の河口部(41°1'N, 140°23'E)と中里町の河口右岸に接する水田地帯、および屏風山地域の西津軽郡木造町平滝沼、ペンセ沼(40°52'N, 140°18'E)、稲垣村田光沼(40°54'N, 140°22'E)である(図 1)。

岩木川下流域では、さえずっているオオセッカの個体数を河川敷では2001年 7月15日の 8時から12時までのあいだにかぞえ、河口の中州では 7月29日の 7時から 8時までのあいだに、河口右岸に隣接する水田地帯では 7月30日の 7時から 9時までのあいだにかぞえた。河川敷での調査範囲は、岩木川の河口から上流へ9.4km地点までのあいだとした。調査範囲の両岸を約 3km毎の計 6区画に分け、それぞれの区画を同時に時速 2km程度で堤防上を歩きながら調査した。調査範囲は、堤防から川の水面までの河川敷全体とした。河川敷の幅は、広いところで約500mである。中州の調査では、中州を見渡せる右岸の堤防上からかぞえた。河口右岸の水田地帯の調査では、自動車で移動しながら水田地帯に点在する休耕田やヨシ原がある場所で停止し、その場所のオオセッカのさえずり数をかぞえた。屏風山地域の調査は、平滝沼、ペンセ沼、田光沼を7月18日の 6時から10時までのあいだに行なった。いずれの沼でも岸

表 1. 岩木川下流域と屏風山地域でカウントされたオオセッカの個体数

Table 1. Number of Japanese Marsh Warblers counted along the lower Iwaki River and a marsh in the Byobusan area.

	2001				Total	1993 1-Aug	1992 12-Jul	1989 8-Jul	1985 23-Jun	1984 24-Jun	1982 27-Jun	1981 12-Jul	1974
	15-Jul	18-Jul	29-Jul	30-Jul									
岩木川下流域 Lower Iwaki River					142	95	79	68	125	102	77	60	118
河川敷 river bed	123				123	84	77	58	92	96	60	47	68
中州 sand bar			14		14	9	2	10	33	6	16	10	-
水田地帯 rice field area				5	5	2	0	0	-	-	1	3	50
屏風山地域 Byobusan area					9	-	13	14	26	22	35	16	113
田光沼 Tako marsh		9			9	-	10	7	11	11	25	10	101
平滝沼 Hirataki marsh		0			0	-	3	7	15	11	10	6	12
ベンセ沼 Bense marsh		0			0	-							
合計 Total					151	95	92	82	151	124	112	76	231

の堤防上および岸の道をゆっくり歩いて、湿地内でさえずっているオオセッカをかぞえた。

### 結果および考察

岩木川下流域と屏風山地域で合わせて151羽のさえずっているオオセッカの雄を記録した。このうち岩木川下流域では142羽、屏風山地域では9羽であった。

岩木川下流域の内訳は、河川敷が最も多く123羽で、次いで河口の中州が14羽、河口右岸に隣接する水田地帯が5羽であった(表1)。また屏風山地域では、田光沼で9羽を確認したが、平滝沼とベンセ沼ではオオセッカを確認することができなかった(表1)。

岩木川下流域は河川敷の幅が広いため、河川敷での調査には若干の見落としの可能性はある。一方、河口右岸に隣接する水田地帯は、広大ではあるが、休耕田は少なく、その休耕田も作付け可能な状態に耕耘されているところがほとんどだった。オオセッカの選好植生は、仏沼ではヨシの高さが1mから2.5mまででスゲ類などの下草が被度50%以上あり、やや乾燥化が進んでいる遷移途中にある不安定な湿地環境とされている(植田・金井 1994, オオセッカ生息環境調査グループ 1995)。また、八郎潟干拓地では湿潤地帯から乾燥地帯への移行途中のごく狭い微妙な環境とされている(西出 1993)。この水田地帯にはこのようなオオセッカが好む環境は少なく、かつそのような環境はすべて調査したので、個体の見落としは少ないと考えられる。また田光沼、平滝沼、ベンセ沼についても、同様にオオセッカの生息しそうなすべての環境を調査したので、見落としは少ないと思われる。

これらの結果から、オオセッカの性比が1:1として生息個体数を推計すると、岩木川下流域で

は約300羽、屏風山地域では約20羽となり、津軽地方での合計は約320羽となる。同様に推計すると、津軽地方のオオセッカ生息数は1975年が500～600羽(日本野鳥の会 1976)、1980年代から1990年代は150～300羽となるので(小山 1990, 村田 1993)、1975年から比較すると半数程度に減少しているが、1980年代以降の約20年間では年変動があるものの、ほぼ同数が生息していたことになる。これを地域別で比較すると、岩木川下流域の生息数は1980年代から1990年代には120～250羽だったので、今回の300羽はやや増加していることを示しており、屏風山地域では同年代の個体数が28～74羽だったので、今回の20羽はやや減少していることになる。屏風山地域においては、田光沼ではここ20年間10羽前後の安定した個体数が記録されている(村田 1993)。一方、平滝沼、ベンセ沼では1980年代には10羽前後が安定して記録されていたが最近10年間に減少し(村田 1993)、今回の調査では記録できていない(表 1)。

屏風山地域におけるオオセッカの個体数減少の原因は明らかではないが、この地域では畑地や道路の造成などがあり、湿地の乾燥化が進行してヨシ原の縮小が見られる(小山・菊池 1993)。オオセッカの選好する植生は限られており、八郎潟干拓地における個体数の大幅な減少は湿地帯の乾燥による植生の変化だとされている(西出 1993)。したがって、この湿地の乾燥化とヨシ原の縮小が屏風山地域における個体数の減少の原因と考えられる。

今回の調査では、岩木川下流域で若干の個体数増加が認められたが、河川敷の乾燥化などにより植生が変化すれば八郎潟干拓地のように個体数が大きく減少するおそれがある。岩木川下流域の個体数を維持していくためには、河川敷の植生を維持・管理していくことが重要と考えられる。また岩木川下流域で繁殖した個体がどこで越冬しているのかを把握し、越冬地の環境を保全していくことも必要と考えられる。

## 謝 辞

本調査は、日本野鳥の会弘前支部の飛鳥和弘、土岐修平、故三上正光、三上範子の皆さんの協力により行うことができた。特に副支部長を勤められていた故三上正光さんには、多大なお世話をいただいた。本報告をまとめる前に他界され、お礼をすることができなかったのはとても残念である。この場を借りて謹んでご冥福をお祈り申し上げる。また本報告をまとめるにあたり、立教大学の上田恵介博士、国立環境研究所の永田尚志博士には大変お世話になった。日本野鳥の会の黒沢令子さんには貴重なアドバイスをいただいた。ここに記してお礼申し上げます。

## 引用文献

- 金井裕・植田陸之. 1994. オオセッカの生息地の分布と現状. 平成5年度希少野生動植物生息状況調査報告書. pp. 1-7. 環境庁, 東京.
- Morioka, H. & Shigeta, Y. 1993. Generic allocation of the Japanese Marsh Warbler *Megalurus pryeri* (Aves: Sylviidae). Bull. Nat. Sci. Mus. Ser. A. 19: 37-43.
- 村田孝嗣. 1993. 岩木川河川敷におけるオオセッカの生息数の変化. 野鳥をたずねて28年. pp. 25-27. 日本野鳥の会弘前支部, 弘前市.
- 永田尚志. 1997. オオセッカの現状と保全への提言. 山階鳥研報 29: 27-42.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録第6版. 日本鳥学会, 帯広市.
- 日本野鳥の会. 1976. 昭和50年度特定鳥類調査. pp. 151-166. 環境庁, 東京.
- 西出隆. 1993. 八郎潟干拓地におけるオオセッカの生態3. 個体数変動とその変動要因. Strix 12: 41-52.
- オオセッカ生息環境研究グループ. 1995. 北国の湿原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究 三沢市仏沼湿原. 第6回トヨタ財団市民研究コンクール助成研究. No.6C-031.
- 大八木昭. 1973. オオセッカの繁殖を確認. 野鳥 38(1): 4-8.
- 小山信行. 1990. 津軽のオオセッカ. 日本野鳥の会弘前支部報 初列風切 45: 4-5. 日本野鳥の会弘前支部, 弘前市.
- 小山信行・菊池弘保. 1993. 屏風山地域の湿地調査. 野鳥をたずねて28年. pp. 28. 日本野鳥の会弘前支部, 弘前市.
- 茂田良光. 1991. オオセッカ. 翼角に小さな爪がある鳥. 日本の生物 5: 48-51.
- 植田陸之・金井裕. 1994. 利根川下流におけるオオセッカの環境選択. 平成5年度希少野生動植物生息状況調査報告書. pp. 19-23. 環境庁, 東京.
- 山階鳥類研究所. 1996. オオセッカ生息状況調査. 環境庁, 東京.
- 山階鳥類研究所. 1998. オオセッカ生息状況調査報告書(鳥類編), 仏沼干拓地編/八郎潟地域編, 東北緑化環境保全(株).

A trend in the breeding population of the Japanese Marsh Warbler  
along the lower Iwaki River

Yutaka Kobayashi<sup>1</sup> & Nobuyuki Oyama<sup>2</sup>

1. Wild Bird Society of Japan, 1-47-1 Hatsudai Shibuya-ku Tokyo 151-0061, Japan
2. Hirosaki Chapter, Wild Bird Society of Japan, 33 Tokuda-machi Hirosaki-shi Aomori 036-8032, Japan

We counted the number of Japanese Marsh Warblers *Locustella pryeri* along the lower Iwaki River and at a marsh in the Byobusan area, Aomori prefecture, in July 2001. We recorded 151 singing males on the territory, 142 at the lower Iwaki River and 9 in the Byobusan area. If the sex ratio is unity, this suggests that ca. 300 breeding individuals of the Japanese Marsh Warbler occur along the lower Iwaki River and ca. 20 individuals at a marsh in the Byobusan area. The total population decreased from 500-600 to 150-300 from 1975 to the 1980s, and was almost stable from the 1980s to 2001 in this area. However, from the 1980s-1990s to 2001, there was an increase from 120-250 to 300 on the lower Iwaki River, and a decrease from 28-74 to 20, in the Byobusan area. The decrease in area of reed beds in the Byobusan area may have caused the decline of the Japanese Marsh Warblers.

*Key words: Aomori, Iwaki River, Japanese Marsh Warbler, Locustella pryeri, population trend*